

愛知県公立高等学校における 男女共学に関する考察（その3）

Research on Co-Education in Local Senior High Schools
in Aichi Prefecture Japan Case Study No. 3

佐藤実芳

SATO Miyoshi

キーワード：男女共学、愛知県公立高等学校、歴史

はじめに

新制高等学校の開設当時（昭和24年度）、愛知県の公立高等学校では、分校はすべて昼間定時制課程¹⁾であった。都市近郊の農村に分校が設置されて、農閑期に学習を集中的に行う機能を担っていた。当然ながら昭和30年代になり高度経済成長の進展とともに、このような昼間定時制課程の高等学校は時代に合わなくなり、統廃合や全日制課程²⁾への転換が行われることになった。その中で、新たに女子生徒のみに限定した全日制課程へ転換した高等学校を、拙稿「愛知県公立高等学校における男女共学に関する考察 家政科設置の『女子高等学校の事例』（その2） 男女共学の学校から女子校に転換した分校の事例」³⁾で検討した。定時制課程として発足した当時は男女共学であったが、全日制課程へ転換した際に女子校になってしまった例である。

今回はまず、男女共学の定時制課程を残して、女子生徒のみに限定した全日制課程を新たに設けた高等学校を検討する。この範疇に入る高等学校は、愛知県立小牧高等学校古知野分校（現：古知野高等学校）と同稲沢高等学校佐屋分校（現：佐屋高等学校）の2校である。次に、2年間愛知県立大府高等学校に併設され、「衛生看護科」のみの高等学校として独立した愛知県立桃陵高等学校を検討する。そして最後に、愛知県立高等学校における男女共学に関して総括する。

1. 愛知県立小牧高等学校古知野分校（現：愛知県立古知野高等学校）

（1）地域の事情

旧古知野町（昭和29年に、布袋町・宮田町・草井村と合併して、現在は江南市）は、尾張北部の木曾川の南岸にある。肥沃な扇状地で、古くから農業が盛んであった。大正元年に名鉄犬山線が開通し、古知野駅（現：江南駅）が設置された。名古屋市の都心から20km圏内に位置し、名古屋鉄道の列車（特急、急行、準急等）に20分程度乗車すれば、都心の名古屋駅に着く。通勤に便利のため、高度経済成長期に名古屋市のベッドタウンとして都市化が進んだ。

(2) 学校設立の経緯

愛知県立小牧高等学校古知野分校は、将来農業を営む生徒が主に通うことができる高等学校として、昭和24年2月20日に開校された。定時制課程普通科1学年1学級で、新制古知野中学校の校舎の一部（学制改革で廃校になった旧古知野実践女学院の校舎）を借りて、授業が行われた。初年度入学者の大半が男子であった。しかし生徒の増加を見込み、翌昭和25年度より1学年2学級に増やした。女子も相当数入学するようになった。

同分校には、家業の農作業を手伝う生徒が多かった。そこで6月（養蚕、麦刈、田植）と11月（芋掘り、麦まき、稲刈）の、農繁期の2か月のほとんどを、農繁休暇とした。そのかわりに、8月に授業を行った。

(3) 高等学校進学者の急増期以前に独立

同分校は、昭和27年4月、定時制高等学校のモデルスクールとして、小牧高等学校から独立して愛知県立古知野高等学校となった。その際、1学年3学級に増加させて、入学定員を150名に増やした。しかしながら、当時既に県内の定時制課程への進学希望者は減少し始め、表1に示す通り、昭和32年度までは定員を充足することが難しかった。そこで昭和31年度に1学年2学級に減らし、昭和33年度には普通科を1学級に削減して、代わりに商業科1学級を新しく設けた。そのような新しい学科の設置の影響で、全校生徒数は表1が示す通り、昭和33年度以降は毎年300人程度に回復して、定員を何とか確保できるようになった。

表1：愛知県立古知野高等学校の生徒数（定時制）

昭和27年度	28年度	29年度	30年度	31年度	32年度	33年度	34年度	35年度	36年度
325人	356人	303人	273人	242人	263人	309人	298人	316人	298人

古知県立古知野高等学校『創立30周年記念誌』、44・46頁より作成。

(4) 通常制課程（女子のみ）の設置とその発展、定時制課程（男女共学）は併設で存続

生徒数の確保に苦戦していた同校は、定時制課程（男女共学）の募集を以前同様に続けながら、昭和34年度に通常制課程の家庭科1学級（女子のみ）を併設した。その後同校は、通常制課程が拡大して学校の主流になり、定時制課程はわき役ようになり、通常制課程に併設される形となった。通常制課程が家庭科で発足したため、女子校となり、その後昭和61年度の共学化に至るまで、同校の通常制課程（全日制課程）は、女子校として発展していった。

そして高度経済成長期、近隣の都市化に伴う人口増加とベビーブームの世代の高等学校進学、さらには高等学校への進学率の上昇により、同校の通常制課程への入学希望者は昭和30年代に増加を続けた。その結果通常制課程の家庭科は、昭和37年には1学年2学級に、昭和38年度には1学年5学級に、更に昭和39年度には1学年6学級に学級数を順次増やした。生徒数の

増加と共に遠距離通学の生徒が増加し、昭和34年度には、入学者の31%にあたる120名が名古屋市在住であったという⁴⁾。

ところで通学に交通が便利な名古屋市内特に中心部の高等学校は、昭和30年代の高等学校進学者の急増時代になると、周辺地域に住む生徒が殺到して入学が困難になった。その結果、名古屋市内の中学生が市内の高等学校に入学することができず、近郊の高等学校に進学するようになったことにより、古知野高等学校への長距離通学者も増加した。交通の便が良くなるとともに、名古屋圏の高等学校が受験学力（偏差値）でランク化され、地元高等学校に通うよりも、自分の学力にあった遠方の高等学校に通う生徒が増えていった。いわゆる受験競争が、激化したのである。

他方定時制課程は、その後細々と普通科（男女共学）で続き、拡大した全日制課程に比べて存在感が薄くなった。愛知県教育委員会のHP「探そマイ！スクール 愛知県立古知野高等学校」⁵⁾によると、男子63名、女子42名の合計105名が定時制課程に在籍している。

（5）男女共学

古知野高等学校は、定時制課程のモデル校として早期（昭和20年代）に独立したという点が、他の分校と異なる。ベビーブームの世代が高等学校に進学する昭和30年代後半になる前に全日制課程に転換したことが、同校のその後の生徒増につながった。また、女子生徒のみの全日制課程の家庭科（後の家政科）を設置した後、昭和30年代に急激にその生徒数が増加したことから、第一次ベビーブームの時期には、女子生徒を対象とした家政科（旧家庭科）に対する進学需要が高かったと考えることもできる。

古知野高等学校の全日制課程は、昭和60年度まで家政科・商業家政科の2学科であり、その教育内容から女子のみを対象としていた。しかし昭和61年4月に商業科を新設して、男子生徒が入学するようになった。これ以降、同校は男女共学の高等学校となり、次第に男子生徒が増加していった。平成30年度現在合計4学科（総合ビジネス科、情報処理科、生活文化科、福祉科）からなる専門高等学校で、生徒総数707名（男子81名、女子626名）⁶⁾である。共学とはいえ、全生徒の約89%が女子であり、女子校の雰囲気を残している。

2. 愛知県立稲沢高等学校佐屋分校（現：愛知県立佐屋高等学校）

（1）地域の事情

旧佐屋町（平成17年4月、佐織町、立田村、八開村と合併して愛西市となる）は、昭和30年、佐屋村と市江村が合併して誕生した。愛知県の西南部にある。同町は濃尾平野の一角を占め、農業が盛んである。

（2）学校設立の経緯

穀倉地帯であるこの地域には農学校（第二次世界大戦前）や農業高等学校（第二次大戦後）

などの、農業を学ぶ中等教育機関がなかった。そのため農学校（農業高等学校）を設置することは長年の悲願であった。昭和の初めから農学校の設置の動きが度々あったが、実現しなかった。また昭和24年頃には、農業高等学校設立の動きもあった。けれども経費の問題で、開校することができなかった。

昭和30年に佐屋村は市江村と合併した。その時、市江村の市江中学校を佐屋村の佐屋中学校に統合した。そこで廃校の施設を転用して、農業高等学校の設置を図った。

当時の山田英三佐屋町長等から稲沢高等学校長へ、農業科のある佐屋分校を開校して欲しいという依頼があり、昭和31年4月愛知県立稲沢高等学校佐屋分校（昼間定時制課程 農業科）が開校した。

昼間定時制課程の農業科なので、佐屋分校では、月曜日・水曜日・金曜日は学校で授業を行い、農業の実習は家庭実習（ホームプロジェクト）という形で行われた。田植や稲刈の季節に、1～2週間の農繁休暇を設けていた。

（3）女子校への転換（全日制課程「女子のみ」の設置）

佐屋分校に、農家の主婦の養成を目的とする家庭科を設置する構想が、開校当初から地元にあった。しかし愛知県は入学希望者が少ないであろうと予想して、家庭科の設置を認めなかった。けれども佐屋分校の初年度の入学者が、定員の40名を大幅に上回る62名であったため、地元は2学級に増設する運動にすぐに取り掛かった。そして翌昭和32年4月には、地域農村の主婦の育成を目的に、定時制課程農村家庭科1学年40名が増設された。これにより女子のみを対象とする学科が誕生した。続いて昭和36年4月に、定時制課程農村家庭科を通常制課程に変更し、さらに昭和38年4月には、農村家庭科を生活科に改称して、定員を1学年150名に増やした。農村家庭科（昭和38年4月以降は生活科）が女子のみを対象としていたため、佐屋分校の全日制課程は、開設以来女子校であった。

他方定時制課程農業科（男女共学）は、昭和46年4月1日に生徒募集を停止して、全日制課程農業科（1学年40名）に変わった。全日制課程農業科は、男女共学であった。

（4）独立

全日制課程の定員の増加により、佐屋分校の稲沢高等学校からの独立を目指して、佐屋分校独立促進協議会が昭和37年7月に設立された。そして佐屋町が近隣農家の理解と協力を得て校地を拡大し、校舎も増築して、昭和40年4月に全日制課程家政科（1学年3学級定員150名）と定時制課程農業科（1学年40名）からなる、愛知県立佐屋高等学校が誕生した。全日制課程家庭科（女子のみ）は、昭和43年4月に1学級増えて4学級になり、更に昭和49年4月から5学級に増えた。

（5）男女共学

佐屋高等学校の全日制課程が、男子生徒のいない「女子校」の状況にあったのは、昭和36年度（通常制課程の農村家庭科の設置）から昭和46年度までの11年間である。しかしその間定時制課程（農業科）は男女共学であり、学校全体が女子校であったわけではない。ただし昼間は女子生徒ばかりであった。また昭和46年度からは男女共学の定時制課程を廃止したが、代わりに同年度に全日制課程に男女共学の農業科を設置したので、昼間にも男子生徒が在籍するようになった。女子生徒が圧倒的に多いものの、一応男女共学の高等学校になった。

佐屋高等学校はその後学科の変更などがあったが、基本的には家政科系と農業系の学科を持つ専門高等学校として今日に至っている。現在合計4学科（園芸科学科、生物生産科、生活文化科、生活情報科）からなり生徒総数575名（男子144名、女子431名）⁷⁾である。共学とはいえ、全生徒の約80%が女子であり、女子校の雰囲気を残している。

3. 愛知県立桃陵高等学校

昭和40年4月1日、前年に発足した神奈川県立二俣川高等学校（現：神奈川県立二俣川看護福祉高等学校）に次いで2番目の「衛生看護科」が、愛知県立大府高等学校に設けられた。そして、昭和43年3月31日に衛生看護科のみの愛知県立桃陵高等学校として独立した。同校は定時制課程の衛生看護科を併設し、昭和48年4月には専攻科も設けられた。

看護は女性の職業と考えられてきた時代が長く、昭和43年に「保健婦助産婦看護婦法」が改正されるまで、男性は「看護人」と呼ばれて主として精神科病院で仕事をしていた。看護職（＝女性）養成という衛生看護科の特性から、同校も女子生徒のみが対象であった。

同校は、平成9年まで女子生徒のみが在籍した。また平成8年に、定時制課程が廃止された。同校は、平成12年に、生活福祉科（1学級40名）を設立した。そして平成14年に、衛生看護科での准看護師養成を止め、衛生看護科と専攻科とを合わせた看護5年一貫教に移行した。

現在は、衛生看護科とヒューマンケア科からなる専門高等学校で、生徒総数225名（男子9名、女子216名）⁸⁾である。共学とはいえ、学科の性格上、全生徒の約99%が女子である。

尚、昭和43年に「保健婦助産婦看護婦法」の改正で、男性は「看護師」と呼ばれ幅広く仕事をすることができるようになった。そして平成13年に同法が「保健師助産師看護師法」に改正された際、男女の区別のない「看護師」と呼ばれるようになった。

終わりに

（1）分校は当初昼間の定時制課程

昭和24年以降設けられた公立高等学校の分校は、当時の農村地帯に設置されたもので、すべて昼間定時制であった。開設当初は女子生徒のみを対象とした分校は少なく、多くが男女双方の生徒を対象としていた。しかし、日本の経済が安定し人手を多く必要としない農業経営に変化するにしたがい、男子は都市部の全日制課程の高等学校に進学し、定時制課程の分校への入

学者は減少した。

(2) 定時制課程から全日制課程へ

女子の高等学校進学率が上昇したため、女子の分校への入学者が増え、一部の分校が女子生徒のみを入学させて女子校となった。しかし女子は、卒業までに4年必要な定時制課程より3年で卒業できる全日制課程を好んだため、定時制課程の志望者は減り、代わって全日制課程の志望者が増えた。愛知県立古知野高等学校と同佐屋高等学校等のように、共学の定時制課程をそのまま継続させながら、新たに全日制課程を設置してその学科を家庭科とし、女子生徒のみを入学させる高等学校もあった。両校とも、定時制課程を全日制課程に転換すると、入学希望者が急増した。特に昭和30年代後半は、ベビーブームの世代が高等学校に入学し、引き続き昭和40年代には高等学校の進学率が急上昇して、高等学校が入学定員を拡大した。

(3) 家政科・衛生看護科の専門教育は、女子のみに

昭和24年度に愛知県で新制高等学校が設置された際、「高校3原則」の一つである男女共学を可能な限り実施した。また昭和40年代までの愛知県では、女子向けの教育を行う学科、特に家庭科（家政科）の需要も高かった。しかし男女共学という理想と、家庭科（家政科）の教育実践とはこの時期必ずしも両立しなかった。その結果、公立の女子高等学校が数校誕生することになった。

この時期、教育関係者には、男女共学の原則を守ろうと声を高くして要求する人々が、資料をみる限りはほとんどなかったように思える。尚、衛生看護科の場合は、看護は女性の仕事と考えられていたために、男女共学にすることはありえなかった。

(4) 高等学校への進学者の急増が女子校を生む

高等学校進学率の上昇、特に全日制課程への進学希望者の増加に対する対応策として、愛知県は新設高等学校を増設するとともに、既存の分校を拡充させて独立させる方法を採用した。その中で家政科（家庭科）単科学科の県立女子高等学校が3校（古知野高等学校、吉良高等学校、宝陵高等学校）が、愛知県に誕生した。男女共学の原則を守ることよりも、高等学校進学希望者をまず高等学校に入学させることを優先した、愛知県の教育委員会の当時の方針が窺える。

(5) まとめ

男女共学の教育と女子校における教育に関して、検討した6校の高等学校に関する検討結果は、次の表2に示す通りである。

分校として学校が開校したのは昭和24年度から26年度の、第二次大戦直後の高等学校が4校であり、他方経済成長に入り始めた昭和31年度の開校が2校である。全校が昼間の定時制課程であり、学科は農業科単独が2校、農業科と家庭科の2学科設置が2校、普通科が2校である。

女子校になった年度は、昭和34年度から昭和38年度である。第一次ベビーブームの世代が高等学校に入学する昭和37～39年度に、ほぼ重なっている。そして女子校になったきっかけは、6校全部が全日制課程への転換であった。全日制課程に転換したときの学科は、家庭科が3校、農村家庭科が1校、普通科が2校であった。

表2 分校から女子校となり、最後に男女共学に戻った高等学校

校名	設立時の課程・学科 (開校年度)	女子校時代の課程・学科 (開始年度)★	男女共学に復帰の契機 (復帰年度)
①古知野高等学校	昼間定時制 農業科 (昭和24年度)	全日制 家庭科 (昭和34年度)	商業科新設 (昭和61年度)
②佐屋高等学校	昼間定時制 農業科 (昭和31年度)	全日制 農村家庭科 (昭和36年度)	農業科新設 (昭和46年度)
③吉良高等学校	昼間定時制 農業科・家庭科 (昭和31年度)	全日制 家庭科 (昭和37年度)	普通科新設 (昭和60年度)
④宝陵高等学校	昼間定時制 農業科・家庭科 (昭和24年度)	全日制 家庭科 (昭和37年度)	男子生徒入学 (平成11年度)
⑤武豊高等学校	昼間定時制 普通科 (昭和26年度)	全日制 普通科 (昭和38年度)	独立・全日制・普通科 (昭和51年度)
⑥東浦高等学校	昼間定時制 普通科 (昭和25年度)	全日制 普通科 (昭和38年度)	独立・全日制・普通科 (昭和48年度)

★：女子校時代の開始年度は、入学生が全員女子になった年度

男女共学に戻った年度は、昭和46年度から平成11年度までと、学校ごとにより異なっている。昭和40年代中頃から50年代初めにかけて3校、昭和60年代初頭に2校、そして平成11年度に1校である。男女共学に戻ったきっかけは、新学科（商業科、農業科、普通科）設置が半数の3校で最も多い。また分校から独立したことが、共学になるきっかけとなった高等学校は2校であった。そして独立が契機となって共学になった2校は、共学化の年度が昭和48年度、同51年度と、比較的早く男女共学に戻っている。

(6) 結び

高等学校は、大学進学に生徒が備える学校（普通科高等学校）と就職の準備をする学校（専門高等学校）の2つに大別することができる。小学校や中学校の義務教育と異なり、特に専門教育では、特定の職業に就く準備を行う。そのためその職業に従事する者の圧倒的多数が女性又は男性の場合、その職業を目指す専門高等学校の生徒がどちらか一方の性に限定されうる。その最も典型的な例が衛生看護科である。「衛生看護科」が誕生した当時、「看護婦」は女子のみの専門職であった。今でも看護師の大半が女性であるので、衛生看護科の生徒の大半は女子

である。このように社会の職業で性別に分かれる傾向がある限り、高等学校、特に専門教育において男女共学を徹底することは難しい。それゆえ現在以上に職業の性分化が徹底していた昭和期の高等学校で、一時的にせよ男女共学から女子校に変わる事例が出るのはむしろ必然的であった。社会の性分業と男女共学は、複雑に絡み合っている。しかし、私立高等学校も含め男女共学が一般化した今日、戦後謳われた「高校3原則」の男女共学の考え方が、自然と受け入れられるようになったといえる。

また今回検討した分校の女子校化の事例は、当然同時期に愛知県以外でも行われていたと考えられる。しかしこれらについて、フェミニストや女性運動家が問題にしたと言う事例は、筆者の知る限りではほぼない。他方大学進学に強い伝統校が共学になるという場合、卒業生が反対したり、地域のマスコミが注目して取り上げたりする。日本においては、男女共学か別学かという議論は、高等学校では主に普通科高等学校、特に伝統のある高等学校に関してなされる。しかしながら、高校生が共学で学ぶ場合と別学で学ぶ場合との教育的効果の相違に関する議論こそ、重要である。本稿がそのような意識を高める契機となれば幸いである。

【注】

- 1) 定時制課程とは、全日制課程とは異なり、特定の時間帯に通学する形態をいう。定時制には、勤労時間帯以外の夜間に通学する夜間定時制、隔日や特定期間の昼間に通学する昼間定時制、昼夜交替の定時制などがある。
- 2) 昭和38年3月18日 愛知県教育委員会規則第3号「愛知県立高等学校学則」の一部改正で、「通常制課程」の表現が「全日制課程」に改称された。そのため本稿では、一般に「全日制課程」の表現を用いるが、昭和38年以前に限定して使用する場合は「通常制課程」を用いる。
- 3) 『学び舎－教職課程研究－』第9号、平成26年、37～50頁。
- 4) 愛知県立古知野高等学校『創立30周年記念誌』、昭和57年、48頁。
- 5) 愛知県教育委員会HP「探そマイ！スクール 愛知県立佐屋高等学校」
http://aichi.mgxcgis.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=054&KATEI=2（平成30年9月20日入手）。
- 6) 同上。
- 7) 愛知県教育委員会HP「探そマイ！スクール 愛知県立佐屋高等学校」
http://aichi.mgxcgis.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=073&KATEI=1（平成30年9月30日入手）。
- 8) 愛知県教育委員会HP「探そマイ！スクール 愛知県立桃陵高等学校」
http://aichi.mgxcgis.jp/myschool/detail.asp?SCHOOL_CODE=087&KATEI=1（平成30年9月30日入手）。

【主要参考文献・資料】

* 愛知県立古知野・佐屋・桃陵高等学校関係のみ

1. 愛知県立稲沢高等学校創立六十周年記念誌編集委員『創立六十周年記念誌』、愛知県立稲沢高等学校、昭和49年。
2. 愛知県立大府高等学校創立30周年記念実行委員会『創立50周年記念誌 飛翔 今、新たな出発の瞬間』、愛知県立大府高等学校、平成10年。
3. 愛知県立古知野高等学校『創立30周年記念誌』、愛知県立古知野高等学校、昭和57年。
4. 愛知県立佐屋高等学校『創立20周年記念誌』、愛知県立佐屋高等学校、昭和60年。
5. 愛知県立佐屋高等学校『創立30周年記念誌』、愛知県立佐屋高等学校、平成7年。
6. 愛知県立桃陵高等学校『20年のあゆみ』、愛知県立桃陵高等学校、昭和63年。
7. 創立六十周年記念誌委員会『曳馬の歩み 創立60周年記念誌』、愛知県立小牧高等学校創立六十周年記念事業実行委員会、昭和58年。
8. 創立七十周年記念事業委員会『稲沢高等学校史』、愛知県立稲沢高等学校、昭和59年。
9. 愛知県立桃陵高等学校HP <http://www.toryo-h.aichi-c.ed.jp/>（平成30年9月30日入手）。
10. 愛知県立古知野高等学校HP <http://www.kochino-h.aichi-c.ed.jp/top.html>（平成30年9月30日入手）。
11. 愛知県立佐屋高等学校HP <http://www.saya-h.aichi-c.ed.jp/>（平成30年9月30日入手）。